

バイパス水路による眼鏡橋の復元

長崎防災都市構想策定委員会と中島川治水計画

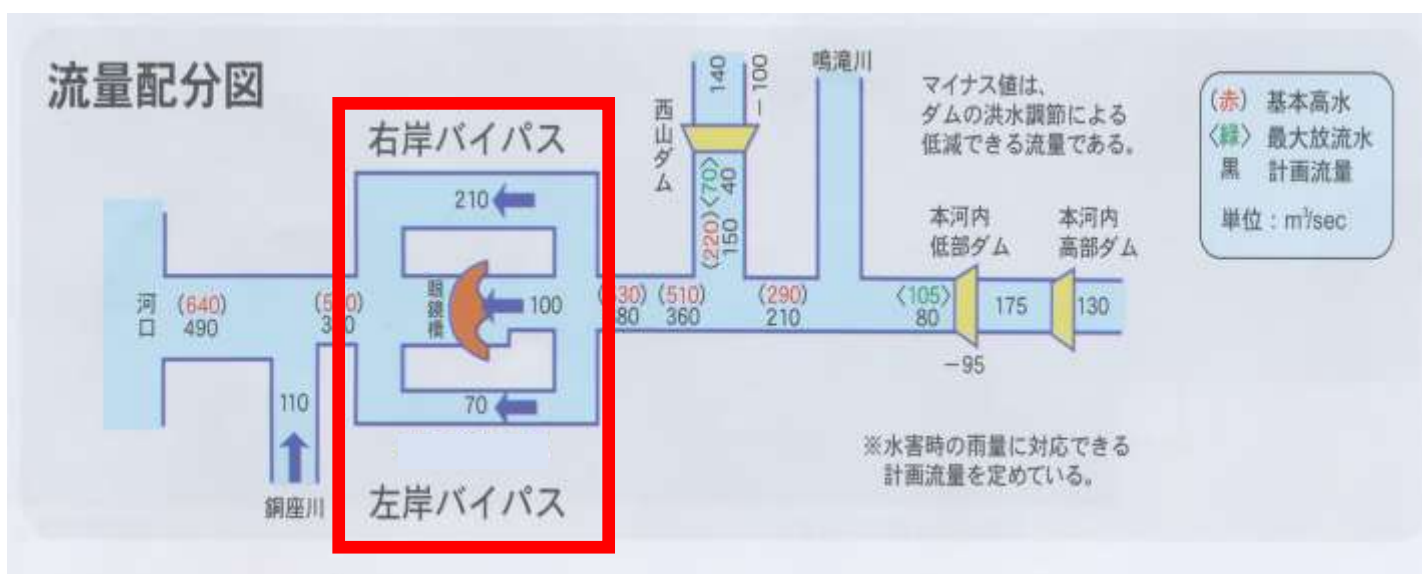
水害直後の昭和 57 年 9 月、市民の代表者や有識者等で組織された『長崎防災都市構想策定委員会』が設立され、「長崎大水害を踏まえて、総合的な防災対策の上に立った長崎の都市づくりはいかにあるべきか」との県知事からの諮問に対し、一年余りにわたって検討が重ねられました。

翌年に出された答申に基づき、上流にあるダム（西山ダム、本河内ダム）の改築による洪水調節と河川改修を組み合わせた中島川の治水計画が決定されました。

また同時に、国の重要文化財「眼鏡橋」は市民の意向と河川の模型実験の結果を踏まえ、現在位置にそのまま残すことが決定され、眼鏡橋付近の洪水を安全に流下させるため、兩岸にバイパス水路が設けられることとなりました。



(写真) 長崎大水害以前の眼鏡橋



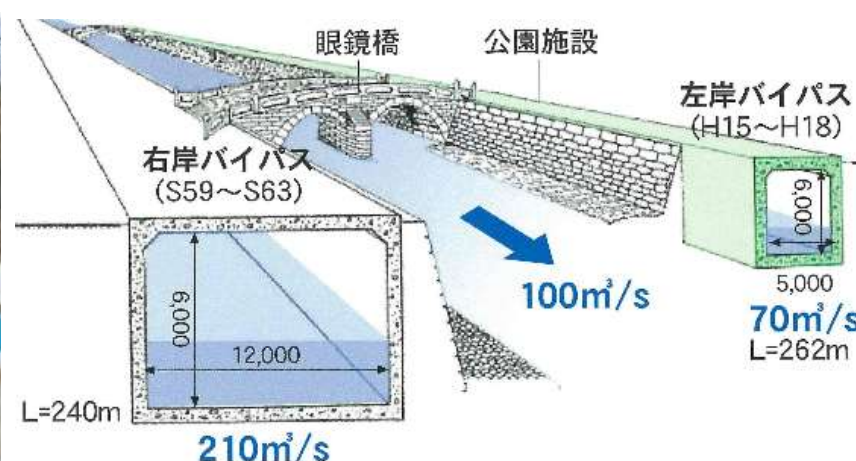
(中島川の流量配分図) 上流のダムによる洪水の調節と左右岸のバイパス水路の分流により、眼鏡橋部の川幅を広げずに大水害時と同程度の雨が降った場合の流量を安全に流す計画がとられました。

バイパス水路の模型実験

バイパス水路の検討にあたり、当時の建設省土木研究所（茨城県つくば市）で水路模型実験が行われました。



(水路模型実験の様子) 1 / 20 縮尺の模型にて、眼鏡橋を中心に上下流 400 m ずつ計 800 m 区間にてバイパス水路の形状を再現し、検討を行いました。



(水路断面図) 実験の結果、眼鏡橋地点で計画流量 380 m³ / s を流す断面として、右岸バイパスは横 12 m、高さ 6 m、左岸バイパスは横 5 m、高さ 6 m の水路をつくる計画が決定されました。